

RA の報告 III

赤石憲昭（社会学研究科博士後期課程）

本報告書では、平子友長教授「社会思想史」において RA を担当した私の実践について、はじめに、(1) その仕事内容と経過を、次に、昨年と同じ実践を行った経験も踏まえ、(2) 私が考える「講義＝演習連結型授業」の意義と問題点を、最後に、全体を通しての私の感想を述べることにする。

1 仕事の内容とその経過

本授業では、社会思想史の古典をテキストとしてレポートを書くことが学生に課され、そのレポートの作成を支援することが RA の主な業務内容である。また、年明け 2009 年度の授業では、学生が口頭発表をすることになっており、そのための支援も含まれる。具体的な経過としては、まず、2009 年 10 月 31 日までに学生の受講申請がなされ、担当学生が RA に割り当てられた。初回の顔合わせは、11 月 11 日で、私は担当となった 2 人の学生と面談し、現時点での希望を聞き、また連絡先を交換した。以下では、この 2 名を仮に A さんと B さんとして、個別にその経過を論じていくことにする。

A さんのケース（商学研究科修士 1 年生：カント「啓蒙とは何か」）

A さんは、商学研究科の修士 1 年生であるが、哲学・思想とはこれまで全く無縁ということであった。初回のミーティングでは、カントの思想に興味を持っている旨が伝えられたが、テキスト決定にまではいたらず、まずはテキストを実際に自分の目で見て判断してもらうことにした。11 月 12 日に「啓蒙とは何か」に決定したというメールを受け、次回の授業日（11 月 18 日）までに、1 回テキストを通読するよう指示をした。11 月 18 日には、レポート作成の際に重要となる、3 つのキーワードを考えることと、それと併せて自分の問題意識を A4 用紙 1 枚程度にまとめるよう指示した。こうして作られた第 1 草稿では、テキストの要約と、キーワード 3 つ「理性」、「先入観」、「理性の公的使用と私的使用」が示されていた。次の作業として、なぜこの 3 つのキーワードを選んだのか、および、各キーワー

ドそれぞれの説明を行うよう指導し、それを踏まえた第2草稿が、1月7日に提出される。この草稿では、テキストの要約と、それぞれのキーワードの説明、および、自分の考察が含まれており、最終レポートの原型が示されていた。しかしながら、なぜ3つのキーワードを選んだのかについては依然として論じられていなかったもので、それを書くように指導し、また、カントの考えと自分の考えとの区別が付きづらい点が多かったので、カントの議論についてはレポートの客観性を増すためにも、積極的に直接引用を行うよう指導し、レポートの構成についても若干の提案を行った。さらに、Aさんは1月27日に口頭発表を予定していたので、その対応についても打ち合わせた。それを踏まえた第3草稿が完成したのが1月22日である。特に文献表示の仕方に問題があったので、それを修正してもらい、口頭発表に臨んでもらった。しかし、大変残念なことに、Aさんの体調不良のため、発表自体は当日キャンセルされることになった。その後、第3草稿について、細かい問題点を指摘すると共に、より内容を充実させるための提案を、「もし時間に余裕があれば」という形でいくつか付け加えてメールで送り、それを踏まえた完成稿が締め切り日前の2月2日に提出される運びとなった。内容的にも、ただ単にカントの議論を紹介するのみならず、批判的な視点も含まれた、非常に充実したものであった。以上がAさんに対する指導の大きな経過であるが、ここに書かれたこと以外にも、毎授業時間前後に、テキストに関する質問への応対等、様々なやりとりがなされていたことを付け加えておきたい。

Bさんのケース（社会学部4年生：ヘーゲル『法哲学綱要』）

Bさんは、卒業論文提出を控えた社会学部4年生で、テキストは、ヘーゲルの『法哲学綱要』が選択された。Bさんに関しては、初顔合わせの時点でテキストが決定したので、その後の作業としては、まずは該当箇所となる「市民社会論」の部分の読解を課題にしてもらった。その後、メール上や、授業前後の時間で、テキストの解釈についての質問に対する応対を何回か行った。読解がある程度終了したと思われる段階で、Bさんにも、3つのキーワードの設定と、問題意識を明文化してもらうことにした。しかし、結果から言うと、この作業が実行されることはなかった。Bさんは、テキストの該当箇所のみならず、その読解の範囲を広げており、また、参考文献にも触手を伸ばしているようで、まだ考えがまとまっていない状態だったようである。Bさんが卒業論文執筆者であることを配慮して、こちらとしても、あまり強制的に作業をしてもらうことはできず、様子を見守ることにした。とはいえ、Bさんは、授業で会った際には、テキストを開いて、解釈の質問をしてくるなど、テキスト読解はきちんとやっているようであった。Bさんの口頭発

表も、Aさんと一緒に1月27日に設定されたのであるが、卒業論文執筆の追い込み時期に当たっているので、当然のことながら、論文執筆を最優先してもらうことにし、社会思想のレポートの進行状況はわからない状態であった。Bさんは卒業論文の執筆が思うように進まず、口頭発表も結局キャンセルすることになったが、まずは卒業論文の完成を目指してもらい、その提出後に作業を再開してもらうことにした。

以上が、私が担当した2人の学生に対する実践である。

2 「講義＝演習連結型授業」について

私は、この「講義＝演習連結型授業」は2度目の経験となる。昨年度の経験とも対比させながら、次に、今回のこの「講義＝演習連結型授業」の①意義と②問題点について考えてみたい。

①「講義＝演習連結型授業」の意義

まず、「意義」についてであるが、通常、1人でレポートを書かなければならない所を、大学院生の個人指導サポートが付くということなので、「学生の立場」からすれば、このような形式の授業は非常に有意義であったに違いない。特に今回担当したAさんは、これまで哲学・思想の本に触れたことがない全くの初心者であったので、良い助けになったのではないだろうか。また、今年度は、昨年度の経験があり、こちらもレポートを完成させるまでの一通りの流れを心得ていたので、計画的に指導を行うことができ、Aさんにも、完成までスムーズに作業をしてもらえたはずである。これらのことは、Aさん自身が書いた、次のアンケートの言葉からも窺えるだろう。

「分かりやすく丁寧な説明をしてくださったことや、スケジュールの忙しさなど個人個人の都合や事情を配慮して、それに合わせる形で指導してくださったので、無理なく自分のレベルに合わせて学ぶことができました。自分だけで参加している授業よりも、「ちゃんとやらなきゃ」という責任意識も高まって、やる気を持って授業も参加できたのでよかったです」と思います」

Aさんは大学院生ということもあり、大分忙しい状況のようであったが、その状況に応じた指導が上手く行えたように思う。もちろん、レポートの内容に関して、まったく不満

がないわけではない。Aさんは、極めて現代的な関心を持って「啓蒙とは何か」の読解に臨んでいたのだが、もっと現在の問題と関連させて具体的に論じることが出来る余地がまだあった点、また例えば、同じような問題意識から書かれた、ミシェル・フーコーによる解釈なども参照できれば、より興味深いレポートに仕上がっていただろう。この前者については、「時間に余裕があれば」ということで、最終提出の前に案を提示したのだが、後者については、状況に鑑みて伝えることはしなかった。このようにこちらとしては多少の妥協はあったものの、限られた時間の中での今回のレポート作成過程は、「講義＝演習連結型授業」のひとつの成功例と言えるのではないだろうか。

また、学生を個人指導するこの「講義＝演習連結型授業」は、RAにとっても非常にやりがいのある仕事である。私はいくつかの大学で非常勤講師を行っているが、その際、大多数の学生に一方的に講義を行っているわけで、個々の学生が何を学んでいるのかは全くわからない状態である。また、評価のために書いてもらう読書レポートなども、そもそもレポートの体をなしていないような文章が多数提出され、非常にもどかしい思いをしていた。しかし、この「講義＝演習連結型授業」では、そのような基本的な指導もしっかり行えた。確かに、レポートの添削指導などは、担当している学生に対して自分が大きな責任を持つことになり、自分がきちんとその役割を果たせるのかというプレッシャーを受けることにもなるのであるが、しかし、レポートを完成させる途上で、学生が自分の指導によってどのように成長したかということ、自分の目でしっかりと確認することができた。このような意味で、この「講義＝演習連結型授業」は、私にとっても、非常にいい教育経験となった。

②「講義＝演習連結型授業」の問題点

次に、「講義＝演習連結型授業」の問題点について、最初に、このシステムそのものの問題点を、その後に、昨年度と比較して、特に今回行われた「講義＝演習連結型授業」の問題点を見てみたい。この「講義＝演習連結型授業」では、これまで示してきたように、学生のレポートの作成の支援を行うのであるが、この授業を受講する人数が判明するのは、授業が開始されて1ヶ月の時点である。つまり、その時点までは、何人の受講生が登録するか全くわからないことになる。それに対して、RAの採用は、授業が始まる前に決定される。今年度は、昨年度の業務負担の大きさから、昨年よりも1名多い体制となったのであるが、実際ふたを開けてみると、受講生の数はあまり変わらないどころか、少なくともなっており、その結果、私の担当した人数も、昨年より少ない2名であった。おかげで、

確かに昨年度よりも負担は大幅に減ったのであるが、これならば、人数を増やさなくとも、対応できたようにも思った。今回は受講人数が少なくなり、RAは1名増えたので、負担は少なくなったのだが、逆に、もし受講生が非常に多く集まった場合には、現状のRAの人数でも対応できなくなるだろう。しかし、その場合でもRAの補充は後からできないため、非常に激しい業務になることが予想される。そのため、採用に関する制度上の問題もあるだろうが、受講生の数に合わせた柔軟な雇用体制ができればいいように思う。

次に、昨年度の経験に照らしながら、特に今回の「講義＝演習連結型授業」の問題点について考えてみたい。昨年度と今年度との大きな違いは、今年度は大幅にあらゆる基準が緩和されたことである。まず第一に、レポートの対象となるテキストについてである。昨年度は、社会思想に関する文字通りの古典が、何冊もまるまる取り上げられていた。昨年度の私の担当で言えば、マキャベリの『君主論』、スミスの『法学講義』、ルソーの『社会契約論』が扱われ、受講生はこのテキスト全体の読解が課されていた。しかしながら、今回は、リストアップされたテキスト数自体も大幅に縮小され、読みやすい本が中心のラインアップとなっており、テキスト全体ではなく「○○章」という形で提示されているものも多かった。このような配慮は、読解の負担を軽減することで、より多くの受講生を集めようという意図と無縁ではないと思われるが、このようにすることで逆に、この授業の価値を低めてしまっているのではないかと私は考える。歴史的に評価された骨のある社会思想の本を1冊読んでレポートにまとめるという、おそらく大学でしかできない貴重な体験をしてもらうことがこの「講義＝演習連結型授業」の目的であり、そして、その難解なテキストを読み切るために、それを補助するRAが採用されているわけである。しかし、今回私が担当した事例で言えば、カントの「啓蒙とは何か」という本は、確かに古典ではあるが、文章も非常に短く、しかもその叙述は極めて平明な部類に属する。もちろん、だからといって、そう簡単なテキストではないし、それを取り上げたAさんが哲学初心者であったため、結果的にはちょうど良かったのかもしれないのだが、このテキストであれば、RAの援助がなくとも、努力して十分読み切ることもできたであろう。このような意味で、私自身としては、指導過程としては非常にうまくいき満足しているのであるが、テキスト選択という点では、消化不良な点が残った。浩瀚な社会思想のテキストに取り組んでこそ、RAが個人指導するこの「講義＝演習連結型授業」の意義が最大限発揮されるのではないだろうか。

また、今年度は、昨年度と比べ、様々なノルマも緩和されていた。昨年度であれば、テキスト選択後、1ヶ月後に第1稿、そしてその1ヶ月後に第2稿、その1ヶ月後に最終稿（更に

その間に口頭発表) というように、実際に形にして提出する機会が公的に設けられていた。その目標に向けて、受講生も RA も作業を進めていったわけである。しかし、今回、このような取り決めは、口頭発表（これも必ずしもノルマではない）と最終提出の期日が設定されているのみで、後は RA の自由裁量に任されていた。もちろん、自由裁量のメリットは大いにあるわけで、私の担当の A さんのケースでは、当人の忙しさの都合を考慮してうまくやりくりすることができた。しかし、B さんの場合では、卒業論文執筆者ということで、彼女の自主性に大幅に任さざるを得なかったので、結局の所、最初の構想段階についてすら、文章化されたものを受け取ることができなかった。私は、B さん自身、確かにテキスト読解にはちゃんと取り組んでおり、また、昨年度の授業でその能力についてもある程度把握していたため、最終的にきちんと仕上げてくれるだろうと見込んでいたのであるが、結局当てが外れることになってしまった。もしノルマが設定されており、それにこだわって作業していたならば、このような事態は起こらなかったとも考えられる。また、指導する側としても、ある程度目標が設定されていた方が、やりやすさがある。そのため、基本的には、共通のノルマを設定し、問題が生じたら、個々のケースで柔軟に対応していく、という形で行っていく方がベターなのではないかと思う。基準を緩和しても、結局の所、昨年度より受講生が増えたかという点、必ずしもそういうわけではない。このため、私は、その方針としては、昨年度のやり方を個人的に支持したいと思う。

3 おわりに

今回、私は 2 度目の「講義＝演習連結型授業」であったのだが、昨年度の経験を活かし、A さんの事例のように、上手くサポートを成功させることができ、私としても非常に満足することができた。その反面、B さんに関しては、卒業論文執筆者ということで私も過度に慎重になりすぎてしまい、うまく結果を出させてあげることができず、非常に残念であった。とはいえ、B さんともコミュニケーションが全くなかったのかということ、そうではなく、授業後やメールのやりとりは継続的に行われていたのである。今回、私は、毎回授業に出席していた。本来 RA は、初顔合わせの時と、年明けの 4 回の発表時以外は、出席の義務はない。しかしながら、昨年度、担当学生との対面でのコミュニケーション不足を痛感したため、今年度は、授業に出席し、その前後に担当学生との面談の時間を持つことにしたのである。これは非常に成功であった。これにより、学生の様子および作業の進展を定期的にチェックもできるし、対面で接していると、これは A さんのアンケート

にもあったが、「高い責任意識」も持ってもらえる。また、テキストに関する質問への応対や、メールのやりとりでは伝えにくい指示なども、より効果的に行えた。この点は、私自身が、昨年の反省を踏まえて、工夫し改善したことである。とはいえ、前述のように、不十分だったと反省することも多い。この「講義＝演習連結型授業」は、まだ試行錯誤の段階ではあるが、この試み自体非常に意義深いものであり、実際に、受講生の評価も高い。何より、RAとしても、このような個人指導は非常にやりがいのある仕事である。この「講義＝演習連結型授業」という形態は、今後もぜひ継続してほしいし、私自身もまた機会があれば、今回の経験を活かして、より良い指導が行えるよう努力したいと思う。

赤石憲昭（あかいし・のりあき）

社会学研究科博士後期課程3年

跡見学園女子大学、東海大学他非常勤講師

専門分野：社会哲学、現代社会論

論文「ホネットの批判的社会理論の批判性——現代における労働と承認の問題圏」（『情況』11・12月号、情況出版、2007）など